■ 戦略研６９ｔｈミーティング議事録

日 時：2009 年7月25日（土）14:00－16:50
場 所：東京／竹橋　ちよだプラットフォームスクウェア
テーマ：「食のグローバル化を考える －食の安全性と食料自給率－」
発表者：應和**邦昭氏（東京農業大学国際食料情報学部教授）**
参加者：参加者　３０人
（経営コンサルタント、財務コンサルタントコンサルタント、シンクタンク研究員、
会社員、地方議員、公務員、大学教員、大学生、ＮＰＯ法人理事長、税理士、
行政書士・司法書士など）
共催：ＮＰＯ法人農業情報総合研究所
ＮＰＯ法人日本危機管理学総研
現代政治戦略研究会

１）代表から開会挨拶、戦略研趣旨、今回ミーティング趣旨
→資料「戦略研概要」
ディスカッション結果を、社会に対しアウトプット。レポート化。参加者へ協力依頼

２）参加者近況報告
・サービサー会社勤務。最近、不良債権問題研究会を立上げ
・普段は、大学にて行政学を学ぶ
・経営コンサルタント会社経営
・銀行にて、新規ビジネス戦略などを行っている
・リース会社にて監査を行っている。第１子、最近誕生
・「できる総理大臣のつくり方」のＰＲ
・道州制.COM を主催。地方分権時代の農業に興味あり
・事業再生などを行っている
・市議会議員。都市型農業を模索。また、都市型農業と食のグローバル化に興味
・農業の持続可能性に強い関心
・奥様が農業生産法人にてキノコの栽培
・実家が兼業農家。稲作
・栃木県農政にて、マルシェ栃木を企画中
・栃木県農政にて、村おこし。栃木食の街道。県内に来ていただきたい
・毎週末、熊谷市の農家に手伝いに。農業につき、税務業務の可能性
・大学時代は、農学部。農業安全保障を勉強
・農業と自民党政治。総選挙の結果で、どのような影響があるか関心あり

３）発表「食のグローバル化を考える －食の安全性と食料自給率－」

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

0　はじめに　ーテーマに係わるキーワードー

●経済のグローバル化 ……現代の経済社会の動きを端的に表す一語

＊経済のグローバル化に伴って食のグローバル化が進展

●食の安全性と食料自給率

＊食のグローバル化によって脅かされる食の安全性

＊低下し続ける日本の食料自給率／脅かされる食料の安定的確保

●農業貿易の自由化……第３のキーワード

＊経済のグローバル化という動きを推し進めている国際貿易の自由化

＊食のグローバル化を推し進めているのが農業貿易の自由化

1　経済のグローバル化とグローバル経済の現実

●経済のグローバル化とは

・・アメリカ化のことである

《モノ，とト，カネ，そして情報が国境を超えて自由に行き交い，地球全体が一つの市場，あるいは一つの経済システムとして均質化，ないしは同質化していく動きのこと》

＊「自由化」「規制緩和」がグローバル化を促進

例）以前は規制されていた500ml以下の容量のペットボトルでのミネラルウォーターの販売が緩和され、大量のペットボトル飲料が市場に溢れた

※應和先生は、「経済学者は、良いことよりおかしいことを指摘していくのが使命」というスタンスであるとのこと。

●グローバル経済の現実…… どこかおかしい，無駄な経済行為が増えつつあるのでは？

＊フランスの水を飲む日本人（表１参照）

日本のミネラルウォーターの70％がフランス産（370億円市場）・・狛江市の財政１年分

砂漠の国であるアラブの水である「マサフィー」まで日本に輸入されている。

日本産の水を飲まないでフランス産の水を飲むのは

2　グローバル化の背後にある経済学の潮流

●移り変わる経済学の潮流

＊19世紀……自由主義経済学（古典学派：アダム・スミス）／マルクス経済学

＊20世紀の前半期……ケインズ経済学（国家による経済のコントロールの必要性を主張）

例）ニューディール（第２次大戦後、インフレや財政赤字になった）

＊1970年代頃から台頭する新たな潮流…… 「新自由主義」「市場原理主義」

・1980年代に政策展開される…… レーガン（アメリカ大統領）・サッチャー（イギリス首相）・中曽根康弘（日本首相）

3　経済のグローバル化を担う自由貿易システムーGATTからWTOへー

●第２次世界大戦後の貿易システム……自由貿易体制

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

＊貿易はできるだけ自由であることが望ましい …… 自由貿易主義
＊自由貿易体制を支えたGATT（General Agreement on Tariffs and Trade：関税と貿易に関する一般協定）……1つの国際協定
＊関税の引下げ、非関税障壁の撤廃を通じて、自由貿易を促進

●繰り返されるGATTの貿易交渉とウルグアイ・ラウンド
＊第8回目のGATTの貿易交渉……ウルグアイ・ラウンド
＊農業貿易がはじめて本格的な交渉議題となる

●ウルグアイ・ラウンド農業合意
＊かつては例外的な扱いが認められ、貿易制限が認められていた農産物
＊関税以外の貿易制限措置は原則廃止 ==⇒ 関税化（tariffication）
例）農産物は関税で保護。高関税の代表は、こんにゃく（こんにゃくの関税は約1000%）
＊農産物の貿易も工業製品の貿易と同じルールで！

●WTO（World Trade Organizatiom：世界貿易機問）の設立（1995年1月1日発足）
＊GATTよりも強力な自由貿易体制／経済制裁措置の発動
・関税を下げるか否か？

4 WTOシステムのもとで脅かされる食の安全性

●確かめにくい外国産農産物の安全性
＊BSE（牛海面状脳症：いわゆる狂牛病）
＊中国野菜の残留農薬問題
＊中国産冷凍餃子事件
トレーサビリティ（追跡可能性）の困難さ

●安全性を理由に輸入制限することが困難なWTOのルール
＊WTO協定を構成する「衛生植物検疫措置の適用に関する協定（SPS協定）」の規定
・衛生植物検疫が貿易制限の手段になることを禁じている
・貿易制限をする場合，輸入国が「科学的根拠」を示すことが必要（難しい）

●「予防原則」に則った輸入禁止が難しいWTOルール
＊ホルモン剤投与の牛肉輸入禁止問題（EU対アメリカ・カナダ）発がん性の問題
＊遺伝子組換え作物も輸入禁止できない！

5 農業貿易の自由化によって脅かされる開発途上国の食料自給

●先進国が支配する世界の農産物貿易
＊主要な食料である穀物の流れは，いまや，先進国 ==⇒ 開発途上国（表2参照）

●アジア，アフリカの開発途上国の食料自給は？
＊アジア．アフリカを中心に、世界人口65億人のうち8億人以上が食料不足の状態
＊換金作物（コーヒー・カカオ豆・バナナなど）に特化する開発途上国の農業

●開発途上国を襲う食の新たな脅威
＊穀物原料によるバイオエタノール生産の急増

All Rights Reserved，戦略経営研究会

＊穀物価格の急騰と食料争奪戦
＊食料輸出禁止国の出現

6　グローバル化の進展と低下し続ける日本の食料自給率

●世界最大の農産物純輸入国＝日本
＊カロリーベースの食料自給率＝40%、穀物自給率＝27%（2007 年）……（表 3 参照）
※穀物には飼料用が含まれている。世界で１２１番目の自給率。
＊国民の 90%以上が不安を表明
＊「食料の安定的確保」の一環として、日本政府は食料自給率向上のための数値目標を設定
・数値目標 2015 年＝カロリー・ベースで 45%（or 50%）

●的外れな農林水産省の食料自給率低下の原因についての見解……「食生活の変化」論
＊「食生活の変化」（食の洋風化）が原因である、とする見解はマスコミや農業経済学者の間に多くみられる
＊だが、「食生括の変化」論では、近年の食料自給率の低下は説明できない（表 3 参照）
・1994 年＝46% ＝⇒　1998 年＝40%

●農林水産省の食料自給率向上策は、「食生活の見直し語」へと向かわざるを得ない
＊「食育のすすめ」「日本食の見直し」に向けてのキャンペーンを展開
＊それ自体は良いことだが……、だが本筋（真の原因を見据えた向上策）ではない

●農林水産省の食料自給率向上に向けての試算（「白書」等で盛んに公表）
＊和食（ご飯・味噌汁・魚介類・青葉等）だと自給率は……70%
＊洋食（パン・コーンスープ・ステーキ寄）だと自給率は……17%
＊だが、農林水産省の主張する和食は、外国産の食材でも可能である……

●食料自給率低下の根本的原因は、「日本農業の国際競争力の無さ」にある
＊ウルグアイ・ラウンド貿易交渉に至るまで、日本がコメをはじめとして多くの農産物に対して保護措置をとってきたことがその証左
＊国際市場において競争力を左右するものは「価格」
・日本の農産物の多くは価格競争に勝てない

●日本の農業から国際競争力を奪った最大の要因は「円高」（表 4 参照）
＊対ドル円レートの急激な変化（円は、国際的に 20 年ほどの間に 3 倍以上も強い通貨に変身）
・1970 年……1 ドル＝360 円 ＝＝＞1990 年代……1 ドル＝約 100 円
＊物価体系・貨幣価値の違い……開発途上国との間で（例えば中国……参考資料 2 参照）
＊経済のグローバル化の中で推し進められる、日本の農産物市場の開放

7　おわりに　－グローバル化からの転換を－

●食のグローバル化と農業貿易の自由化がもたらしているもの
＊食料貿易の拡大による地球環境破壊
＊脅かされる食の安全性
＊脅かされる食の安定的確保（食料安全保障）

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

＊一握りのアグリビジネスの利益拡大

●食の観点からのローカル化の必要－ローカルなものに重きを置いた思考への方向転換を！

＊食の安全性は農と食（生産と消費）の距離に反比例する

＊「安価・簡便」と「リスク」は背中合わせ

●食の観点からのローカル化の動き－すでに共通した動きが世界中に！

＊地産地消

＊フード・マイレージ

＊ローカル・フード運動（CSA：地域が支える農業）

＊スロー・フード運動

●的確な事実認識をふまえた意識改革を！

＊食の安全・安心は、消費者が意識的にそれを求めようとしない限り、得られない

＊賢い消費者に－無駄を省いて茸沢を－

＊生存に関わることがらは、すべてを市場原理にゆだねるべきでない！

＊改めて「豊かさとは何か」考えることが必要では？

＜質問＞

・Q（S さん）：「元政策秘書です。自給率に関して、食の欧米化が問題といわれますが、農業の担い手の減少問題についてどう思いますか？　競争力の意味は？」

A：應和先生の回答「日本は工業中心の立国なので、農業を外国との自由競争するのは、そもそも困難。市場で価格競争になったら日本の農業は勝ち目がない。品質重視による差別化は一部の例外である。担い手は所得確保の必要がある」

・Q（K さん）：「大学生です。ゼミで食料自給率６０％（飢餓の限界ライン）を目指して研究している。競争力を上げて自給率をあげるにはどうしたらいいのか？」

A：應和先生の回答「市場での競争力という視点で考えるのは難しい。イギリスの自給率が 100%を超えたのは、政府が手厚い保護をしたからである。現在の日本は畜産飼料の不足を輸入に頼っているが、耕作放棄地の問題も含め、日本政府が手厚い保護をするべきと思っている」

４）議論「日本の農業の SWOT 分析」

應和先生の発表（食のグロバール化、国際競争力など）を受け、Ａ班とＢ班に分かれて、日本の農業の SWOT 分析を行う。各「強み」「弱み」「機会」「脅威」を付せんに記入し、ホワイトボードへ貼り付ける。その上で、日本の農業の問題点を明らかにし、解決策を検討する。

なお、Ｂ班おいては、「日本の農業」からさらにダウンサイジングして、「日本の農業をいかに強くするか？」、「国際競争力向上をいかに行うか？」をテーマに議論が行われた。

Ａ班

「食のグローバル化を考える －食の安全性と食料自給率－の講義を聴いた上で、参加者が二手に分かれてディスカッションを行った。

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

日本の農業に関してのＳＷＯＴ分析を行った。
ＳＷＯＴ分析：経営戦略を考える上で基本となる思考方法（フレームワーク）である。
強み（Strengths)、弱み（Weaknesses)、機会（Opportunities)、脅威（Threats）
戦略研では、参加メンバーに付箋紙を渡して、自由に記述してもらっている。
ＳＷＯＴ分析の作業による効果：①各個人がイメージだけで漠然と考えていた事象が言語化しやすくなる　②異なる価値観から導かれた気付きや提案はファシリテーターが交通整理をしていく過程でメンバーに共有される　③重なる部分はそぎ落とし、骨子だけを残した結果、全体を俯瞰できる状態になる　④ＳＷＯＴ分析を経てクリアになったシンプルな設計図により将来への洞察が可能となる
ポイントとしては、全員参画が原則で、一枚でもいいので必ず付箋を書いてもらうこと（自分の考えを表明することが重要！)。また、付箋の多い項目は、メンバーの問題意識が強いことがわかる。

・日本の農業の「強み（Ｓ)」

① 安全性
安心、安全な農産物を作れる
衛生基準が比較的高い
生産者の顔が見えて安心（トレーサビリティ）
食の安全性→日本ブランド
② 技術力
農業力（ノウハウ）
丁寧・こだわり
品種改良力高く、味が良い（同様３枚）
高品質（種子、種苗、果物・野菜）（同様３枚）
作物が多種生産できる

③ 流通・保存技術の発達
新鮮な生産物を供給できる（流通網）（同様２通）
冷蔵・冷凍技術が高い（保存面・鮮度が良い）（同様２通）
④ 日本の文化の多彩さ、メンタリティ
日本人の食べ物は幅広い
例）葉っぱビジネス。高齢者でもできることがある
自然保護の意識が強い
⑤ 経営面
企業の農業進出
農村共同体力（横のつながりの強さ）
良いも悪いも国の保護政策
若年層の低賃金化で相対的な農業の魅力アップしている
日本は狭いが海外の農地への展開も考えられる。農業企業と買う金がある

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

・日本の農業の「弱み（W)」

① 制度面の遅れ、不備

グリーンコンシューマーの不足

遅れている農協中心の生産システム

農地を合理的に使用できない農政の貧困

農業委員会の弊害

農地法。がんじがらめの農地システム。参入障壁

村社会に新規参入するのが難しい

生産者に重くのしかかる税制システム

相続税が高い生産緑地の問題

水資源の対策不足（適切な管理がされていない）

② 経営面の遅れ

農家に経営ノウハウがない

ブランド力の不足

農機具リース代。ランニングコストが高い

労働生産性が低い。生産経費が高すぎる

③ 地理的制約

・・広大な平地が少なく、大規模農業が展開しにくい

土地が狭い（同様４通）

大量生産出来ない（同様３通）

耕作放棄地が点在している

④ 担い手の高齢化問題

生産者の高齢化（同様３通）

担い手のプロ農家のノウハウが少子高齢化で伝承されていない

⑤ 収入問題

収入の低い人が多い

農家の所得のみで生活できるのか（単収の限界）同様２通

野菜生産は未だ良いが、穀物生産は儲からない

⑥ 価格・流通面の問題

価格競争ができない

ＪＡがからむ、流通システムの問題点

流通コストが高い

⑦ 農業への偏見、無知

若年者の農業に対する知識・誤解がある

他人事と感じてしまう、自覚力のなさ

⑧ 意識、モラルの問題（悪化している）

モラルの欠如（食品偽造）

農村のほうが声がデカイ。選挙の一票の格差

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

過剰な食物の流通

・日本の農業の機会（0）

① 世界的な傾向

日本の人口減少（→食料自給率UPするか？）

世界の人口増加（→農産物輸出、中国人の消費力の増大）

農産物価格の上昇（世界的な穀物相場の急騰）

世界的な食品安全意識の高まり

② 日本の農産物が世界的にブランド化のきざし

世界中で日本食ブームが起こっている

海外でブランド米・ハイテク野菜・本格日本酒の人気が上昇中

中国・インドの富裕層が安全性と品質に注目

世界中のお金持ちに日本の農産物を買ってもらう時代が来る

③ 国内の和食回帰（健康志向）

メタボ体策で和食が見直されてきた

懐石など和食ブーム

④ 日本の地理的優位性

温暖な気候で四季に特徴がある

豊かな森林資源（これから戦後に植えた杉の伐採期に入る）

水が豊富で耕作適地が多い

国土が狭く、生産地と消費地が近い（流通コストが安い、新鮮さが保てる）

⑤ 規制緩和の影響

農地法の規制緩和。効率経営ノウハウを持つ企業の参入が容易に

農地法の改正→企業参入促進

⑥ 環境意識の変化

環境保全。CO2、エコ対策

外食産業が自社で国内生産にシフト中（ブランド、差別化）

農業経営塾や学校ファーム（食育）

農業＝環境にやさしいというイメージがある中での環境重視政策

環境意識・安全意識の高まり　→　国産品の消費拡大

アジアへの環境保全型農業技術の提供

⑦ 農業ブームの影響

渋谷のギャルが、農ギャルになっている。トレンド早い人が注目している

（雑誌の特集も増えている）

食料危機の不安から農家の男性がモテている（らしい）

アグリビジネスへの注目

⑧ 安全性へのこだわり

家庭菜園ブームにより国産志向が強くなっている

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

弁当男子の増加で自炊ブーム。意識の向上
海外の食の安全への無責任化（国産品への信頼が高まる）
⑨ その他の注目
特産物の消費（各地で努力してブランドをつくっている）
海外のソムリエが日本の蔵で修行（人材・技術の提供）
日本のネームバリュー

・日本の農業の脅威（T）

① 世界的な傾向
世界的な農地減少
エネルギー不足
石油が値上がりして、流通がしにくくなる（コスト高）
外国の農地の買収
② 温暖化
地球温暖化の急速化。農産物の温暖化対策がついていけなくなる（３通）
③ 価格競争
海外農産物との価格競争についていけない
円高が継続し、海外品との価格競争にさらされる
値段だけではなく、外国産の安い野菜がレベルを上げてくる（農薬を減らすなど日本向けにしてくる）
④ 外圧による自由化の流れ
ＦＴＡ交渉。日本は工業製品を海外に売るために、農産物の関税障壁を下げざるを得ない
市場開放要求が強く、保護政策が取りにくい
農業貿易の自由化（政府は、ＷＴＯ交渉に関する国民的な議論を起こしていないのでは？）
スーパー３０１条
国際歩調
外交交渉力がない、外圧に弱い、アメリカの通商代表部（同様５通）
⑤ 自給率の低下
農林水産ともに、自給率低下。国産品、消滅の危機
食べ物の大量廃棄（自給率が低いのに！）
⑥ 作り手の意識の問題
消費者がよくわかっていない（嗜好や生活スタイルの変化などに対応できていない）
⑦ 制度面の不備による不安要素
農協の金融の弱さ
少子高齢化（子育て支援対策の不足など）
⑧ 海外から狙われる？日本の農業
農地法改正による外国資本の土地の買占め
中国などによるニセ日本ブランド

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

日本の水資源（山間の水源地）が中国に買われている現状

⑨ その他の不安要素

輸出入バランス（国産工業品と海外農産物）

前例にこだわる

漁業。中国、韓国、インドネシアの乱獲による不漁

【Ａ班総括】

世界的な日本食ブームの中、日本は水と自然の豊かさや安全性、高品質な農産物のブランド化が進みつつある。伸びる余地は大きく、チャンスも多い。

例）フランス在住の日本人が作る高品質な「日本のカブ」がフランスの三ツ星シェフに大人気だという（註：山下農園のこと）。

国内でも農業が注目を浴びており、健康志向による和食回帰や環境意識の高まりなどもあるが、海外から入ってくる安い農産物の影響もあり自給率は低下中。

農地法改正や法人の農業参入など規制緩和による「ビジネスとしての農業」の可能性には注目が集まるが、期待が多い半面、少子高齢化で担い手問題（高齢化で技術の継承ができない、農業では収入が低すぎて人材が育たないなど）もあり、実際にはなかなか厳しい。

その他、農業の制度面の不備、海外からの圧力、自給率 UP など課題は多いが、環境負荷をかんがみて地産地消を基本とし、現在の農業への注目を一過性のブームではないものにしていきたい。

Ｂ班

各人のまず問題意識共有（自己紹介を兼ねる）

・将来的に、日本が工業国でいられるか疑問。農業をセーフティネットへ。そのため食料自給率向上が必要

・農業の現状と、経済学的な数字の話しの距離感。また、２～３年スパンぐらいでのディスカッションが良いのでは。民主党の農業政策など

・食料の安定供給と食料自給率。集約化、効率化、法人化

・農業の担い手をいかに増やすか。農家の所得を上げる

・米。日本に合った作物。と、減反政策

・農業だけでは食べてはいけない。稼げる農業へ

・都市と地方の意識の差異。高くても良いものをという消費者の意識必要

・国民の農業に対する意識に疑問。いったい、どうしたいのか？

・制度提案だけでなく、体験必要。新潟にて、農業体験（用水路の掃除など）

・食料自給率（カロリーベース）の数字のあやしさ。むしろ、食料安全保障。海外からの輸入ストップの可能性を想定しての国内農業注力（日本が海外から買うためのお金がなくなる可能性）と、国内農業不作となったときなどのための海外からの安定供給のためのパイプ（国際政治のバランス。気候変動）

・食料自給率は、エネルギーの輸入ストップについてはカウントしていない

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

・農業の担い手。もうかっている人はもうかっている。むしろ、退出者が増えて、新規就農者が増えることはチャンス。ただし、新規就農は、あくまでビジネスとして、趣味は×
・農地法改正。とにかく、これ以上の優良農地の転用を止めねば。また、新規就農者へ農地が流動しなくては日本の農業の生産性向上は可能。ただし、農地集約は必要も、これがイコール大規模農業となり、海外農産物（穀物）との価格競争に勝てるかとは別の話し

→この後の議論は、日本の農業をいかに強くするか？、国際競争力向上をいかに行うか？の視点にて行う
→強みから、一つ一つ
→全部書いてもらってから、ファシリテーターにてまとめて、議論へ

「強み」
品質、味、安全性
ブランド力
日本人に合ったもの
農業インフラ整備（中国などに比較して。灌漑設備）
市場に近い
単収の高さ
　→あまり高くないのでは？　量より質なので

「機会」
世代交代。退出と新規就農
　→東日本は、集団営農。西日本は、一匹狼
　→稲作は、入りやすい。野菜は、ノウハウ必要。また、リスクも高い
消費者の環境意識の高まり（フードマイレージによる地産地消→WTO の規制を逃れる？）
消費者の安全意識の高まり
政権交代
　→自民党の票のための、農業保護政策（この政策の悪さが、弱みにつながる）

「弱み」
賃金高い
土地が狭い
農業自体以外の周辺セクターにカネが回る
継承が難しい
農協
　→ただし、農協に変わる組織はない
　→あるいは、農協から圧力
農業への金融の難しさ（用水路など資産価値が出ない→資産がない→担保がない）

All Rights Reserved, 戦略経営研究会

農協が確定申告まで行う。農家は自分がどれだけ儲かったかわからない
→農業は、産業ですらない
　→そもそも、国際競争力向上は疑問

「脅威」
海外からの安い農産物
低価格志向の進行
自由貿易の進行
エネルギー価格の高騰
農業インフラの更新時期
　→今後、メインテナンスが出来なくなる
　→頭数が減る。１戸あたりの負担増
種子の輸入（モンサントの独占→米国でのロビー活動）

【提言】
消費者に対し。国の農業をどうするか？。消費者が意識を変える
国に対し。国は農業をどうするか？
　→産業として、農業を成り立たせる方向へ
　　→地方の危惧。法人の進出。しかし、撤退したらどうなる（企業の競争原理）
　　→本来的な意味の、農協が必要ではないか？（相互扶助的に農業経営をサポート）
　　→地方は、あまりに受動的。能動的に自助は考えないのか？

※Ｂ班発表
強み、日本市場に近い。ニーズ（環境意識の向上）を捉えた農産物
農業を産業として捉えるとしても、単に企業の競争原理で行うのではなく、
長期の視点、地域の視点での政策が必要
消費者は、日本の農業を生かすのかどうか？を考えるべき

All Rights Reserved, 戦略経営研究会